産経新聞
平成２７年（2015年）１月１７日　土曜日
H27.1.17

あの日を忘れない

Dr.和の町医者日記

「生と死」シリーズ④

1・17に考える 人間の「覚悟」とは

あの日から、ちょうど20年がたった。あの朝のことは鮮明に覚えている。大げさではなく、この世の終わりかと思った。大きなたんすの横で寝ていたが、もし私の上に倒れていたら、今私はこの世にいない。築30年のマンションはなんとか倒壊を免れた。生かされたのは、たまたま運が良かったからだ。

あれから町医者に身を転じ、必死で生きてきた。大切な人を失い、今も毎日、悲しみに暮れている人が自分の周りにも何人かいる。生き残っても、復興計画の会議のストレスで倒れた人も見てきた。表面的には復興したように見えても、失われたものはあまりに大きい。あの災害から私たちは何を学んだのか。そして、東北の被災地の人に何をお返しできているのか。「3・11」以降、自問自答の念は大きくなるばかりだ。

20年前の震災当時に宝塚市立病院の副総看護婦長だった黒田裕子さんは、被災者の支援活動のため病院を離れたきり、帰らなかった。体育館の避難者に寄り添い、西神第7仮設住宅の入居者を抱きしめた。そして、宮城県気仙沼市の面瀬中学校仮設住宅などで活動を続けていたが、病に倒れて旅立たれた。しかし「災害看護」という道を開き、多くの後進を育てた。私も黒田さんの影響を強く受けている。あの震災は人生の大きな転機だった。

政治や行政機能もまひした、あの混乱状況の中で、頼れるのは自力だけだと思い知った。非常時には個人の力が大きくなることを、20年前のこの日に学んだ。

復興公営住宅の高齢化率が50％を超えたという。都会の中の限界集落になりつつある。その中で昨年も「孤独死」が40人あったという。発見まで11日以上かかった人が6人、1カ月以上かかった人が2人。仮設住宅が解消した平成12年1月以降の孤独死の累計は864人に達するそうだ。

年々、復興公営住宅の住民から往診を頼まれることが増えてきたが、行くと、どこか閑散としている。入ると、ガランとした部屋の中で叫んでいる高齢者がいる。魂の叫びに聞こえる。いや、本当に魂の叫びなのだろう。医療者として、その苦悩にどこまで寄り添うことができるのか。黒田裕子さんのように抱きしめることはできなくても、何かお役に立つことはできないものか。地元の復興公営住宅にさえ寄り添えていないのに、東北を支援するなんて本当にできるのか。答えの出ない課題を抱えたまま、正月を迎えた。

光明は、震災を知らない世代が成人式を迎え、テレビのインタビューに「防災が大切だ！」と言ってくれることだ。戦争と同じで、残された者が語り継がなければ、犠牲になった人に申し訳ない。防災こそが最大の予防医療だ。

しっかりと備えることで、たくさんの命が救えることを私たちは学んだ。その教訓を次の災害に生かさなければならない。防災を専門に学ぶ高校生たちは明るく、希望の象徴だ。防災は「覚悟」でもある。人間の力が及ばないものに対する畏敬の念とともに災いを最小限に食い止めることを考え、広めようとしている震災を知らない世代の人たちは宝だと思う。皆さまの20年間の努力の結果であると感謝したい。

願わくば、阪神の経験を東北に伝え続けたい。私たちは震災の20年後の姿を知っている。お金や物以外にも「知恵」という支援もあるはずだ。20年前、たしかに私たちは自助と共助で立ちあがってきた。23年7月に出た拙書「共震ドクター　阪神そして東北」を読み返しては、生涯この日を忘れまいと自分自身に言い聞かせている。

復興公営住宅　阪神大震災では、県や神戸市などの被災自治体が約4万2千戸の災害復興公営住宅を供給した。当初は被災者に限定されていたが、その後は一般の入居者も受け入れている。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成７年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

ひょうご